2005年上山市学生訪独団～滞在記～

家族が増えた!!

上山から飛び出した5人の若者に
ドイツに新しい家族が増えた…
そこで学んだこと、感じたこととは…

ハル家と伊藤綾華さん

“ママ、いつも優しく話しかけてくれてありがとう。アン・カトリーン（左）、ショッピングとても楽しかったね。ずっと仲良しでいてね”

エベルレ家と尾形佳那さん

“みんなとっても親切にしてくれてありがとう。ぜひ日本に遊びに来てね。これからも手紙書くからね!!”

ヘーフレ家と尾形達朗くん

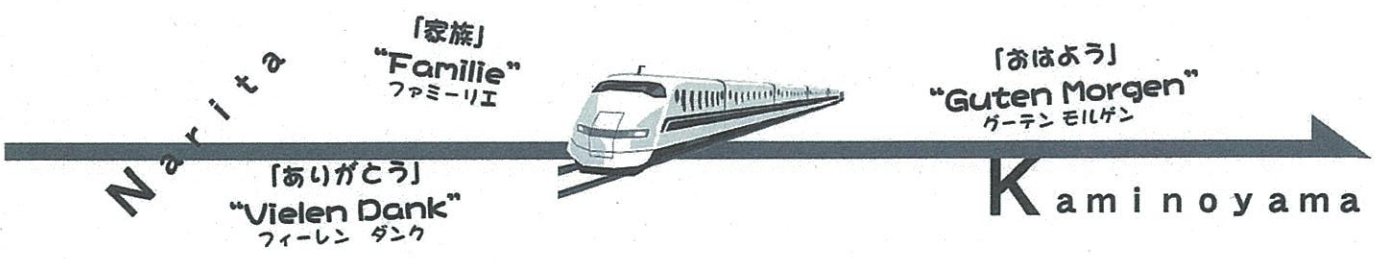
“これからはメールするよ。パパには聞きたいことがたくさんあるんだ。ママは別れ際泣いてくれたね。スベーニャ（左）は僕を弟のようにかわいがってくれた。ありがとう!!”

シュトラウプ家と酒井菜三子さん

“「Happy Birthday! From your family in Germany（お誕生日おめでとう！ あなたのドイツの家族より）」の突然のメール驚きました。感激です！ありがとう、わたしのドイツの家族!!”

ケトラー家と柴田沙織さん

“パパはお風呂のマイスター、日本では「匠」ってとこかな。ママのケーキは絶品だったよ。シュテファニー（左）、一緒にいると毎日がとても楽しかったよ。またきっと会おうね”



Donaueschingen 訪独 Kaminoyama

「よろしくね。」温かい歓迎

「ドイツの先進的な環境政策・福祉制度を見てみたい」、「日本とは違う異文化に触れてみたい」、「ホストファミリーとして受け入れたあの子との再会の約束を果たしたい」など様々な思いを胸に、7月24日、家族や関係者が見送る中、5人の学生がかみのやま温泉駅を出発しました。

翌日、成田空港を後にした一行は、12時間のフライトを経てスイス・チューリッヒ空港に到着。その後、車に乗り換えホストファミリーの待つドイツ・ドナウエッシンゲン市へ向かいました。参加者たちはこれから迎える異国での生活に胸を高鳴らせる一方、異なる文化・言葉・環境での生活に不安と緊張を感じていました。

そして、ド市役所前に到着。市役所前にはすでにホストファミリーの方々が垂れ幕を持って温かく出迎えてくれました。この予想外の歓迎ぶりに参加者の緊張した顔もたちまちほころび、自然と笑顔に。

そしてその日から、ホストファミリーとの決して忘れることのできない思い出の生活をスタートさせました。

訪独団一行は、実業高校・保育園訪問、日本料理教室開催、そして、ド市が上山市の他に海外友好都市を結んでいるサベルネ（フランス）を交えた3か国合同のワークショップ（意見交換会）や野外活動に参加しました。

ホストファミリーの温かい出迎え

ド市フライ大市長を表敬訪問

到着3日目の7月27日、訪独団一行は、ド市フライ大市長を表敬訪問しました。市役所では大市長をはじめ多くのみなさんが温かく出迎えてくれました。

そこで、斎藤茂吉の歌「大き河」を伴奏をつけて熱唱。大市長からは「あなた達はこれから歌の巡業に行くのですか」と冗談が飛び出すほど、大変喜んでくれました。

Nach zehn Jahren Aufwärmzeit: **Städtepartnerschaft** reizt alle Altersschichten

Kaminoyama ist angekommen

KLAUS GRAGLER

「かみのやまがやってきた」という見出しで地元紙の一面を飾る

「自然と笑顔に」

Ayaka Ito

伊藤綾華さん
（高校2年・金生3）

ド市の街並みはとてもきれい。日本と造りが違って目新しいこともあり、どこをとっても絵になる所ばかり！アン・カトリーンとショッピングに行ったときもすごくきれいで感動でした！ショッピングモールは大通りの両脇に、お店とは思えない雰囲気のあるお店がずらりと立ち並び、あぁ異国に来たんだなあと実感させられました。

また、ドイツでは知らない人でも目が会えば、相手に対して「好意的ですよ」という意味を込めて笑顔を向けるのですが、そんな世界にいたためか、日本に帰ってきてから、友達からよく笑うようになったねと言われます。

アン・カトリーンとは、彼女が昨年、上山市に来たときにホストファミリーとして受け入れた時からの付き合いで、今でもメールでやりとりをしています。日本語ならすぐのやりとりも、英語なので時間がかかりますが、今後も変わらずメールは続けたいです。彼女たちとはまた会いたいです！！

「発見！ドイツ!!」

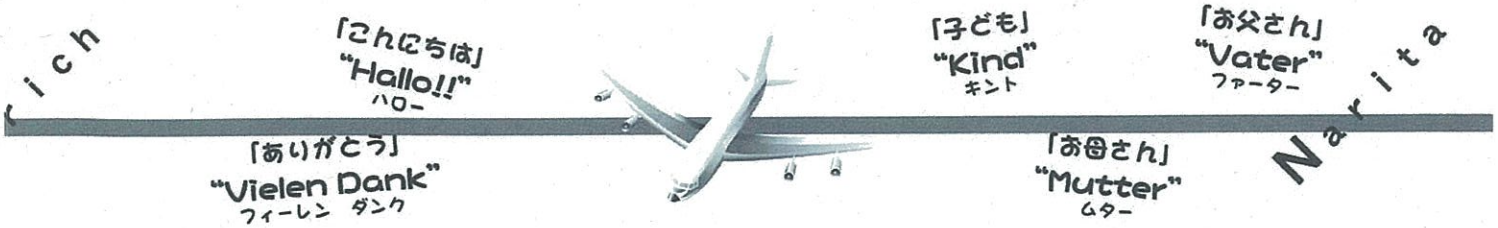
Taturou Ogata

尾形達朗くん
（高校1年・金生2）

わたしは中学校時代にＡＬＴ（英語指導助手）の先生と英会話を体験したことで外国に興味を持ち、将来の夢はジャーナリスト。そのためにもヨーロッパという、自分には未知の世界でいろいろなことを知りたいと思い参加しました。

ホームステイ先では、家の中で靴は脱ぐし、宗教的なことも全く気にならなかったのでそれほど生活の違いはないと思いました。しかし、食事については大きな違いが…。それは味の濃さと食事の量!!味がはっきりしすぎて食べられないことが何度もありました。そのうえに食べるスピードが男女を問わず速い！家族の中で自分がいつも食べ終わるのが遅かったです（これには本当にビックリ）。

このように小さな発見からド市の歴史や取り組みを知るという大きな発見までできて、自分では本当の国際交流ができたと思います。これからさらに友好を深めるためには、相手を知る前に、自分を知ること。そこから国際交流の第一歩が踏み出せるのではないでしょうか。



Donaueschingen

食文化

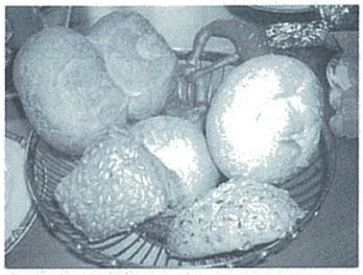
Kaminoyama

えっ、飲み物は冷やさないの!?

その国の文化を見るときに、見過ごすことのできないもののひとつに、食文化があげられるのではないでしょうか。では、ドイツの食文化はどういったものなのでしょう。

日本では主食は米ですが、ドイツではパンでした。米やパスタも食べますが、やはりパンが主になっています。パンにも様々な種類がありました。そして、肉。肉についてもドイツ人は日本人と異なる味覚を持っています。日本では適度に油の入った(霜降り)肉が好まれがちですが、ドイツでは純粋に赤身の肉を食べます。

また、店に行くと出されるジョッキの大きさが違い、なんと1ﾘｯﾄﾙくらい入るもので飲んでいます。さらに驚いたのはビールでもジュースでも冷蔵庫では冷やさないということ。ぬるくても彼らはとてもおいしそうに飲んでいます。日本人なら、暑い夏は冷たいものをグイッと飲みたいものですが。


いろんな種類のパン
"とってもおいしそう"

訪独団ちょっと 奇妙な体験談①

ドイツの学生と○○さんと街中を歩いていたとき、急にたくさんの子どもたちに囲まれたんです…。

「一体何?」って、○○さんと不思議がっていたら出されたんです、ペンを!!サインくださいって…。

何でわたしたちが…。でもサインはしておきました。その子たちのTシャツに。あまりにしてくれって頼まれたので。でもどうしてなんでしょうかね。地元の新聞に載ったからかな?あっ、やっぱり、上山の人に愛着があるからですかね!!(笑)

Donaueschingen

エコ

Kaminoyama

リサイクル大国

ドイツといえば、環境先進国として世界的に有名です。もちろんド市でもゴミの減量化、リサイクルは進んでいます。例えば、スーパーのレジ袋、日本では買い物をすればほとんど無料でもらえます。しかし、ド市では有料です。そこで買い物客は、自分の買い物かごを持参します。

また、缶製品は少なくほとんどがリサイクルしやすいビン詰めになっています。

さらに、ペットボトルの回収にも工夫がなされています。ドイツでは、購入した店に持って行き、所定のリサイクルボックスで回収すると、その店で使える割引券がもらえます。「日本でも回収はしているけど割引券なんてもらえないよね。割引券がもらえるなら結構みんな頑張るんじゃないかな」「リサイクルは当然で

Saori Shibata

「優しい国　ドイツ」

柴田沙織さん
(大学3年・八日町1)

わたしには保育士になる夢があり、福祉に大変興味があります。ドイツは人にも地球にも優しい国と聞きました。大学でもドイツについて学んでおり、いつかは行ってみたいと思っていました。

ド市は、シュヴァルツヴァルト(黒い森)など自然豊かで、伝統的な建物や教会は昔のままの歴史が感じられる街でした。また、街のあちこちには、自然の冷却器として水を利用した施設があり、地球に優しく、日本も見習うべきだと感じました。

最近では日本でも「バリアフリー」という言葉が定着してきてますが、個々の配慮がまだ足りないと思いました。ベビーカーを押した女性が階段の前で困っていると知らない人にもかかわらず、ホストファミリーのパパが「手伝いますよ」と言って手を差し伸べていました。果たして日本ではどうでしょうか。そこが問題だと思います。高齢化の今だからこそ、今後の教育課程の中で福祉をもっと積極的に取り入れる必要があると感じました。

Kana Ogata

「触れ合いが私を変えた」

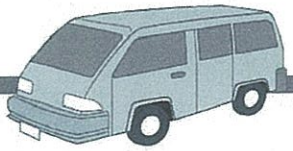
尾形佳那さん
(高校2年・金生2)

ド市に着いて早速ホームステイ先での生活が始まると、英語の会話が飛び交い、聞き取るだけで精一杯。家族と打ち解ける前に1日が終わってしまいました。次の日は「もっと話そう」と思いましたが、質問に答えるだけで終わってしまいました。これではいけないと3日目は自分でも驚くほど積極的に話しかけました。文にならなくても単語を一つひとつ組み合わせ。すると自然に動作と表情を交え、会話らしいものができました。

また、朝、わたしがドイツ語で「おはよう」と言ったらホームステイ先の家族が喜んでくれました。わたしは素直に嬉しかったし、もっとドイツ語を覚えて、もっと話したいと思いました。このときは、自然に交流というものを楽しんでいたのだと思います。様々な人と触れ合い、お互いの価値観を尊重し理解する。「国際交流」は人と人との触れ合いから生まれる。それを考えるとホームステイはとても良い触れ合いの場だと実感しました。

「乾杯!!」
"Prost!!"
プロースト

「姉妹」
"Schwester"
シュベスター



「おやすみ」
"Gute Nacht"
グーテ ナッハト

「誕生日」
"Geburtstag"
ゲブルツタック

「兄弟」
"Bruder"
ブルーダー

小さなころからしっかり教育されているみたい」「生ゴミも肥料にして利用していたし」と訪独団のみんなは話します。ド市ではリサイクルはもちろん、「ゴミ」を出さないことを常に心がけているのです。

ちょっとしたところから環境対策

みなさんは、暑い夏、車に乗って渋滞に巻き込まれたときどうしてますか。カーエアコンをかけて進むのを待ってはいませんか。

「止まるといちいちエンジン切るんです。それをほとんどの市民がしている」と訪独団。ド市では、渋滞や赤信号のときはその都度エンジンを切って環境に配慮しています。日本とドイツ、みんな同じ地球に住んでいるのに一人ひとりのエコに対する意識にはだいぶ温度差があるようです。

訪独団ちょっと

奇妙な体験談②

ドイツの人々が書いた文字、なんかおかしくないですか？尊敬の「敬」の字…。それから、「高慢」って言葉、ドイツでは「プライド」って言っていました…。

スーパーに行ったときも海苔のパッケージになぜか「回転寿司」の文字。日本の漢字が流行っているのは嬉しかったのですが、ちょっと複雑な気分になりました…。

Donaueschingen
団らん
Kaminoyama

最も大切なのは家族の時間…

ドイツでは食事のときテレビはつけません。家族団らんの時間を大切にし、その日の出来事を話し合う。食後もすぐに退席するのではなく家族でゆっくりと共通の時間を過ごす…。

家事は家族で分担し、どこの家庭にも食器乾燥器があります。できる限り家族の時間を取り、大切にしています。

さらに、ドイツでは、親戚や友人の誕生日をとても大切にしています。「家のカレンダーは親戚の誕生日のチェックでいっぱい！パーティーが立て続けに入っているし」そう訪独団の一人は話します。誕生日…、その人が生まれた日。その人にとって一番素敵な日。その素晴らしい日を忘れずに祝福し合う。他人を思いやる豊かな心はこういったところからも育まれているのかもしれません。

Donaueschingen
成長
Kaminoyama

学んだこと、感じたこと…

言葉の不安を抱えながら異国に飛び込んでいった5人。そこで、彼らが共通して体験し、感じたのは、相手を理解するのに本当に必要なのは「言葉」ではなく、「お互いに理解しようとする心」だと口をそろえます。言葉が通じないという日本とは全く異なる環境で得たその心は、ホストファミリーとの温かい触れ合いがあったからではないでしょうか。言葉を越えて相手を理解する。まるでいつも一緒にいる「家族」のように…。その意味で彼らはド市にもう一つのかけがえのない「家族」を持つことができたといえるのではないでしょうか。

さらに、「やればできるという自信」もそのぬくもりの中で学びました。言葉が通じないために全身を使って、試行錯誤してコミュニケーションをとり、意思を伝える体験を日々してきたからです。

彼らは今後もホストファミリーとの交流を深めていきたいと言っています。現在、この学生訪独がきっかけでドイツの学校に語学研修している大学生がいます。彼女は、当時のホストファミリーに会いに行ったそうです。盟約締結10周年を迎え、11月には市民友好訪問団の交流もあります。

個人はもちろん、ド市と上山市の国際交流の輪も確実に成長してきています。

「わたしの国際交流」

Namiko Sakai

酒井菜三子さん
（大学２年・高野）

「国際交流」…これがこの旅の一番の目的。そして、それはきちんと果たせたと思います。特にそれを感じたのは、通訳なしで、フランス・ドイツ・日本の３か国の学生で行ったゲーム。説明はドイツ語で、それをホストファミリーのペアテとその友人が英訳し、それを苦労しながら日本語に解釈していきました。フランス語・ドイツ語・英語・日本語の４か国語が飛び交う日本では味わえない状況をわたしはうれしく感じました。ゲームが成功したときは苦労した分喜びは大きく、おかげでお互いに他国の言葉に興味を持ち、教え合うことができました。お互いに情報交換をする。これこそが真の国際交流なんだと感じました。

また、日本語を使わずに２週間外国にいたことで、英語力に自信が持てましたし、これからも積極的に外国人とコミュニケーションが取れるようになったと思います。

最後に、私を家族同然に扱ってくれたホストファミリーのみなさん、一生忘れない思い出をありがとう。